

1 はじめに

ジュニア救急法(中級)はジュニア救急法(上級)の前段階として位置付け、対象は小学高学年である。発達段階と学校の保健授業を考慮したうえで、カリキュラムの編成を以下のようにする。

2 指導計画

時間	指導項目	指導内容(抜粋)	評価の観点
1	応急手当の必要性	自分で出来る手当 人にやってもらう手当 いつどこで誰がやるのか 救命曲線 心肺蘇生	自分で出来る手当てと人にやってもらう手当の基準は何か
2	止血法 包帯法(巻軸帯)	血液量と直接圧迫止血法 基本巻・突き指の固定包帯	自分の血液量と止血を理解し、実技が出来たか 包帯の実技が出来たか RICE が分かったか
3	心肺蘇生①	一連の動作を完全に覚える 大人を呼ぶこととAEDの重要性 二人一組での実技練習	心肺蘇生はどのように行うのかが分かったか
4	心肺蘇生②	二人一組での実技練習 レサシアンでの実技	心肺蘇生までの一連の流れを実技で出来たか 119番通報、大人の人とAEDの依頼が確実に出来たか

3 準備するもの

レサシアン・滅菌ガーゼ・包帯・フェイスシールド・血液量を知る(ペットボトル)など

4 指導上の留意点

- ① 指導時間1単位時間は、参加人数等により40分～50分とする。
- ② 子どもに分かり易く説明するためには、気道確保(空気の通り道)や下顎挙上法(下顎の骨張った堅いところを上挙げて首を伸ばす)など言葉と説明の工夫が必要。
- ③ 出来るだけ理論は短く、実技を中心に実施すること。
- ④ 実技は二人一組で出来るように工夫する(二人で実施することで、疑問点など質問し易くなる。心肺蘇生についても実技は二人一組で繰り返し行い、そのあとレサシアンを使って一連の動作実習を行う。
- ⑤ 教材は市販されているもの(止血法実習モデル等)もあるが、教材を工夫し視覚に訴えるものを考えたい。

※ 中級は心肺蘇生(大人の人とAED到着)までの一連の動作を実技内容とし、止血法や身近に起きるけがを想定した講座を考える。